

2015. 9. 22 (火)

## マタイ 25:31-40 より

加納和寛

はじめに

みなさんおはようございます。初めてお会いする人もいるかもしれません。秋学期の宗教主事代行を務めさせていただきます。神学部の教員の加納和寛と申します。これから4ヶ月間、よろしくお祈りします。

さて、2015年度の秋学期が昨日から始まりました。この中には、世の中はシルバーウィークだというのになんで学校に来なきゃならないのかと思っている人もいます。でも反対に考えてみてください。世の中の大半の人が休みの時にこそ働いている人もたくさんいますよね。百貨店をはじめとする小売業の方々、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンやディズニーランドなどのアミューズメント施設で働く人々、あるいは今日もそれを利用してここまで来た人も多いと思いますが、阪急電車や阪急バスなどの公共交通機関の人々など、数え上げたらきりがありません。皆さんのうちの何割かも、大学を卒業したらそういう仕事、つまり土日や祝日に働くのがメインの仕事に就くかもしれません。そういう意味では、カレンダーの上では休みなのに学校に来なきゃならないというのは、カレンダー通りに誰もが休めるかということ、社会というものはそんなに単純なものではない

という勉強にはなるかもしれないですね。

私は通算14年間、日本とドイツの大学および大学院で最終的に博士号を取るまで勉強しましたが、ずっと神学しか勉強してこなかったもので、ほかの学問のことはよくわかりません。これから神学の話ですが、皆さんは社会学部の学生ですから、わかりにくかったらごめんなさいね。

ほんとうにそうか？

神学や哲学の場合、人間、真理、善、悪というものについて、なんとなく、うすぼんやりと誰もが持っているイメージ、常識のことを、ギリシャ語でドクサと呼びます。今風の日本語だと「思い込み」という意味です。そして、そのような思い込みを「ほんとうにそうか？」と疑い、徹底的に調べることはとても大切なことだとされています。たとえば、500年くらい前までは「神は存在する」というのは誰もが当たり前だと信じて疑わない事柄でした。それを「ほんとうにそうか？」と考える人々が出始めましたが、これは最初の頃はかなり勇気のいることで、一歩間違えると火あぶりの刑にされちゃったりしたわけですね。その後、言論の自由などが保証されるようになるとそういうこともなくなり、

20世紀になると「神なんかいない」という人がいるのは普通になりました。すると今度は反対に「神がいないとどうして断言できるんだ？ほんとうにそうか？いるかもしれないじゃないか」と疑問を投げかける人のほうが勇気のある疑問を持つ人ということになっています。私はときどき親戚や友人の結婚式に列席者として招かれて、この牧師の祭服姿で披露宴に出席すると、何でか必ずその場で急にスピーチを頼まれるんですね。今時クリスチャン、牧師、しかもドイツまでキリスト教を勉強しに行っていて、大学でキリスト教を教えている人なんか見たことない、珍しいからひとことしゃべってくれというわけです。ほとんどパンダみたいなもんですね。もしくは落語家かお笑い芸人と同じような扱いです。しょうがない、わたしもサービス精神がちょっとはあるものですから、受けを狙う話をして、たまにすべっちゃったりなんかするんですが、それはそれでおもしろがってもらえたりします。昔はお坊さん、牧師といった聖職者というそれだけで尊敬され、あがめ奉ってもらえました。それが今ではお笑い芸人扱いです。ほんの数百年、いや数十年で常識なんて簡単にひっくり返ってしまう良い例だと思えます。

### 最も価値あること

じゃあいったいどうしたらいいのか、そんなこと言ったら何もできないじゃないかと思うかも知れません。キリスト教では、これに対して一つの提案をします。「あなたが寿命を終えて死んだとしましょう。自分の人生を振り返って、いったい何が本当に価値あることでしたか？お金を儲けたことでしたか？

イケメンや美人とつきあったことですか？ベントを買ったことでしたか？でっかい豪邸を建てたことでしたか？いいえ、それよりもっと価値があるものがあります。目の前で困っている人を一人でも助けたこと、これこそ最も価値があることです。」

はあ？と思った人がいるかもしれませんが。でも考えてみてください。東日本大震災で被災した方々のために、みなさんいろいろな形で協力したじゃないですか。募金をした人、募金活動を手伝った人、被災地まで行ってボランティアをした人、そのほか何かの形で困った人を助けるために手を差し伸べた人がこの中にもたくさんいると思います。それですよ。震災の被災者だけでなく、みなさんがいま生きているこの社会、目の前で困っている人がいたら手を差し伸べること、それがキリスト教では最も価値のある行動だとされています。

### 目の前のできごと

そんなこと、ふだん何も見当たらないですよ、学校と家を往復する生活の中で、そういうことなんか何にもないですよという人がいるかもしれません。そんなことはありません。先週わたしは大学から家に帰るために、いつものように仁川駅のホームで電車を待っていたら、すぐ近くに白くて細長い杖を持った中年の女性がいることに気がつきました。もうおわかりですよ。視覚障がいの方です。電車がホームに到着しました。ドアが開きましたが、女性は電車に近づくと杖で扉の場所やホームとの段差などを確認しながら慎重に電車に乗ろうとしました。当然ながらほかの人よりも時間がかかります。私はホーム

と、扉の開いた電車の中の両方にまたがり、列車の一番後ろからこちらを見ている車掌さんに手で小さく合図をして、時間稼ぎをしました。女性が電車に無事乗ったところで私も電車に乗りました。私がしたのはそれだけです。

この私のしたことがどれだけ必要性のあることだったかどうかはわかりません。やらなくてもよかったのかもかもしれません。でもそんなふうな、困っている人を見つけ、そのために私たちにできることは、よく観察すれば毎日の生活の中にいくらでも見つかります。遠くで起きた災害のためにボランティアをするのも素晴らしいことですが、目の前で困っている人のために直接何かをすることも、それと比べることができないくらい価値のあることなのです。

## 新しい学期に

新しい学期が始まりました。やるべきことや目標の定まっている人、そういうものが見つからなくて迷っている人、予定がいっぱい詰まっている人、あんまりなくて何をしているかわからない人、いろいろでしょう。もし時間があつたら、いまお話したこの課題を思い出してみてください。「私の目の前に、私にできる価値あること、すなわち困っている人、助けを求めている人に手を差し伸べるチャンスがあるかもしれない。じつはそれはもうあるんだけど、自分が気がついていないだけかもしれない」。そしてお手元の聖書を開いてみてください。あなたのこれからの行動についてのヒントが見つかるかもしれません。これから4ヶ月間、毎週火曜日と木曜日にみなさんとチャペルでお会いできることを心より嬉しく思います。この秋学期を関西学院の建学の精神であるキリスト教によって、充実したものにしていきましょう。

(神学部准教授・

2015年度秋学期宗教主事代行)